

町工場が息づく下町、 長田にて思う

三ツ星ベルトは今年、関西財界セミナー賞2009特別賞を受賞しました。“真野地区まちづくり推進会”に参画し、地域社会の一員として創業の地、神戸市長田区真野地区のまちづくりに長年取り組み続けたことが認めただけだと、非常に喜ばしく思っております。

1995年に発生した阪神・淡路大震災は長田に大きな被害をもたらしました。火災でまちはほぼ全滅、震災後、人口は激減…このままではまちが寂れてしまうと危機感を持った住民の皆さんの総意として真野地区まちづくり推進会から、神戸のハーバーランドに92年に移転させた本社機能を再び真野地区に戻し、まちの活性化に協力してほしいとの要請をいただきました。当時、真野地区には工場と研究所を残しており、やはり研究開発部門と管理部門は同じ場所にある方が都合がいいのではと考えていたこと、そして何よりも、日本の産業を支えてきた町工場が息づく下町の面影を残す数少ないまち、長田を日本の原点として残したい、長田の活性化に当社がお役に立てるのなら、との思いで決心し、2000年11月に本社を戻しました。

それからは特に子どもたちに長田を楽しい思い出のつまったふるさととして覚えておいてほしいと願い、4月は小学校に入学した新1年生をお祝いする会、5月には当社の四国工場に隣接する海岸に出かけてのさぬき手打ちうどんと地引網体験会、12月のふれあいクリスマス会などさまざまなイベントを開催しています。なかでも2001年7月7日に神戸市営地下鉄海岸線が開通したことを祝って始めた「たなばたま祭り」は地元の婦人会や青年会にも輪が広がり、500人規模で始まったものが、いまや5,000人を集めるお祭りとして長田の夏の風物詩となりました。すべての活動は、三ツ星ベルトグループ社員で構成するボランティア団体「三ツ星ベルトふれあい協



西河 紀男 氏

Norio Nishikawa

三ツ星ベルト会長

議会」が主催し、経費も社員個人の寄付でまかなっています。初めのうちは彼らにも企画や準備が大変だとの思いがあったようですが、回を重ねるごとに楽しい思いの方が増しているようです。若い人ほど積極的に活動に参加していますし、「ボランティア活動が盛んだから」と当社を志望してくださる方も増えています。活動を通じて地域住民と社員が顔なじみになるのはもちろんのこと、役員と社員、部署を越えた社員同士のコミュニケーションが深まる効果も実感しています。

最近は何でもお金が基準ですが、はたして世の中とはそれだけなのでしょう。企業とはものづくりがあり、製品一つひとつに心をこめることが必要だと私は信じています。ですから、中小企業や町工場の“匠の技”ともいえる技術を大切に育てるという責任を特に上場企業は感じるべきであり、企業は利益率や配当率だけではなく、どれだけ技術を蓄積しているかといった「技術蓄積力」や「技術開発力」でも評価されるべきです。そうしなければ日本は本当にだめになってしまう。当社が地域活性化に尽力するのは、長田の小さな企業や町工場働く人々の心のよりどころになればとの思いもあるからです。力をあわせて何かをすることで心を通い合わせ、苦しい時には励ましあい、時には仕事を紹介したりする。そういった昔ながらの方法で日本の技術を育成することも忘れてはならないのです。関西には育てるべき種がたくさんあり、育てられる環境も残っています。まだ遅くはありません。

談